

平成22年 新年を迎えて

～名古屋大学からNagoya Universityへ～

名古屋大学の教職員の皆様、学生の皆様、全学同窓会の皆様、そして名古屋大学をご支援いただいております多くの皆様、新年明けましておめでとうございます。日本各地で、様々な現場で、新しい年への期待と発展を心に、良い年を迎えられたことと、心よりお慶び申し上げます。



名古屋大学総長

濱口道成

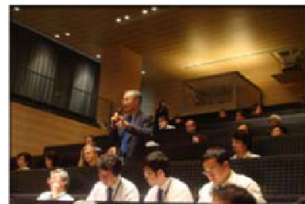
図らずも、名大トピックスの月号は、200号の節目となるものとなりました。この記念すべき新年号に、初めてのご挨拶を申し上げる光栄を得ました。昨年4月、平野先生の後任として総長に就任し、実に40年ぶりに戻った東山キャンパスは春も盛りでありました。日々眺める豊田講堂周辺の緑は、新緑から濃緑へ、そして錦秋の秋から新年へと、驚くほどの速さで変化していきました。時の流れを実感する1年であったと思えば共に、名古屋大学の発展のための課題を思い浮かべつつ新年を迎えております。旧年中、皆様から頂いたご指導、ご鞭撻に改めて感謝申し上げますとともに、本年も変わらぬご支援をお願い申し上げます。

さて、我々は、次期中期計画をまとめる作業と並行して、名古屋大学総長の運営指針として「濱口プラン」をまとめました。我々の目標は「名古屋大学からNagoya Universityへ」であります。世界に通じる名古屋大学を作り上げるため、骨子となる課題は5点あります。具体的には、

1. 世界に通ずる人材の育成: 教養教育の充実、G30の推進、5年で留学生2000人超へ
 2. 世界トップレベルの研究推進: GCOEの推進、国際水準の若手研究者の育成、超高压電子顕微鏡・シンクロトロン光施設を活用した最先端研究の推進
 3. 組織の刷新: 創薬科学研究科設置、教育研究組織再編、大学間連携
 4. 地域連携・地域貢献の推進: 「知の拠点」との連携、地域医療再生
 5. 名大基金の充実: 5年で50億、奨学金などに活用
- であります。

今、世界の大学はグローバル化とIT革命の流れの中で、大きく変容しつつあります。一昨年のリーマンショック以降、日本は厳しい経済状況下にあります。この「百年に一度の不況」も世界が共通のITを用いた経済システムで動くようになった結果ともいえます。現在進行中の金融危機は、グローバル化の負の表現型の一つに過ぎないのです。そして、教育・研究の拠点である大学も、激変を続ける世界とは無縁の存在であり続けることはできません。グローバル化は、大学の規格化、マスタ、序列化、市場化と国境を超えた大競争を必然的に要求し、IT化の劇的な進展は、知識の再編とフラット化、瞬時化、情報の奔流を生み出しています。この中で、長い年月をかけて形成されてきた日本の大学も変化への適応と個性の明確化を求められており、国際的に通用する人材の育成を再構築する時代を迎えていると言えます。

昨年春のことです。総長就任にあたり、多くの諸先輩にお時間を頂き、名古屋大学の人材育成についてご助言を頂きました。諸先輩が異口同音に指摘された事は、「名古屋大学の卒業生は、誠実、実直、堅実だが、おとなしく…」でありました。実際、名古屋大学の入学生の75%余りは東海4県出身であり、まとめて、父や両親の教えによく従い、「北の大地に憧れ」たり、「箱根の関を越え」たいとは思っていなかった子ども達です。これらの本学学生の地政学的特性を考慮する時、名古屋大学の4年間に、「地元民を国際人へ」と変えさせ、「土着的な心をもった国際人」を育成する教育をするべきと考えます。野依先生、益川先生、小林先生、下村先生、赤崎先生、豊田全学同窓会長をはじめ世界の各地で活躍する多くの先輩に続く人材を育成できる教育環境を作り上げていきたいと考えています。



昨年、名古屋大学は文部科学省のグローバル30(G30)プログラムに採用されました。このプログラムを契機に、本学の留学生を、10年間で1,500人から3,000人へ倍増し、講義全てを英語で行う教育を準備しています。本年3月にはウズベキスタンに事務所開設を予定しています。また、日本人学生の英語力を強化するため、昨年4月より、新入生全員にプレースメントテストを課し、3段階のクラス分けによる英語教育を開始しています。プレースメントテストで一定の点を取れなかった学生が受講するサバイバルコースの学生の中には、TOEFLの点数が半年間で100点以上上がる学生が現れ、総長表彰を行います。また昨年、アジアの協定校をいくつか視察する機会を得ましたが、我々の国際化は、近隣の国に大きく後れを取っていると実感しました。例えば、上海交通大学は学生の20%を何らかの形で海外体験させており、さらに目標を50%に上げたいとしております。本学のもっとも古い協定校南京大学(1982年協定)には、同窓生から寄附されたビルディングがあり、その中には20年前に設立されたジョンスホプキンス・南京大学センターが開設されています。同センターでは、ジョンスホプキンスの教授が英語で教育を行っており、過去3,000名の人材が育てられています。本年は、厳しい財政状況が控えてはありますが、本学学生が、気後れすることなく国際体験を積むことのできる環境を、可能な限り整えたいと考えています。

昨年は、名古屋大学にとって、創立70周年(創基138周年)を祝う年でありました。記念式典では坂田東一文部科学事務次官、神田真秋愛知県知事、河村たかし名古屋市長、豊田章一郎全学同窓会長よりご祝辞を頂き、多数の先輩が出席されました。記念行事の圧巻は、本学男声合唱団OBIによる合唱でありました。平均年齢70歳を超えと思われる先輩が、朗々にして圧倒的な迫力で合唱されました。また、会場でお会いした諸先輩は、それぞれ本学への想いを胸に抱いておられ、感慨深い会となりました。さて、なぜこれほど大学時代というものは、私たちに郷愁を呼ぶのでしょうか。名古屋の酷暑に耐え、伊吹おろしの寒さをしのぎ、片思いと失恋にまみれ、銭湯とラーメン・ライス、4畳半1間で生き延びた4年間、80歳の方には人生の20分の1程に過ぎない期間が、なぜ大切なのでしょう。この4年間の体験は、人各々異なっても、共通することは、人生の原点であり、自我を形成し、自己の可能性に気付き始める時間であったりしないでしょうか。少なくとも私には、40年経った時、自分の中で結晶化し続ける体験と教育が、あの4年間に在ったと思います。昨年春、鶴舞キャンパスから東山キャンパスへ移動したとき、改めてこの事実が気が付く気がいたしました。

昨年、機会を得て、韓国、上海、北京、ベトナムの名古屋大学全学同窓会海外支部の方々とお会いできました。またモンゴルのウランバートルでは支部を立ち上げ、医学部に留学し、モンゴル保健省の次官も務めたアルタントーヤさんに支部旗を渡すことができました。お会いできた各支部の方々の中には、70年代、80年代に本学に滞在され、数年間にわたって文字通り苦学された方々が多数見え、当時の体験をお話いただきました。



た。大変苦しい生活であったにもかかわらず、皆さんに共通してある想いは、名古屋での生活が、かけがえない大切な体験である事です。私自身も、80年代に3年余りニューヨークで過ごし、この想いを共にするものであります。異文化の中で生きるとは、生きることの本質を改めて問い直す時間であると共に、自国の文化の素晴らしさに改めて目覚める機会でもあると思います。そしてまた、それ以降の人生にとっては大きな転機となる時代でもあります。今、世界は、暴走する人間社会の前に、生物の多様性が危機的な状況にあります。生物の多様性の確保が、地球生命圏の維持に必須であるとするなら、グローバル化の時代において、異文化への尊敬、文化の多様性の維持は、人類の幸福と平和に必須であります。将来日本の核となるべき本学学生に、自我を形成する時期に異文化体験をさせることの重要性は、ここにあります。



本学では、平成18年に名古屋大学基金を設立しました。当初基金の目標を200億円に設定しておりましたが、100年に1度の不況の中で困難にぶつかっており、私の在任中の目標として50億円を定め、現在21億円を超えるところまで到達しております。基金目的は様々ありましたが、私は主に留学生の奨学金に充てたいと考えております。基金の募集にあたっては、思いがけず多くの方々からご支援をいただきました。ある新入生は、入学後間もなく父を亡くしました。御両親の名前を豊田講堂の銘板に残したいと、厳しい経済状況の中からお母様の女性から下駄の鼻緒をいただき、お礼を申し上げたいと申し出たところ、その感謝を次に会った困っている方に返して下さいとの答えを頂いたそうです。この方は、年を経て功になった時、この言葉を思い出し、基金に多額の寄附をされました。また、癌から生還した私の医学部時代の先輩は、その想いと体験を込め、多額の寄附をされました。先日、多額の寄附を頂いた名古屋帝国大学工学部の一期生である91歳の大先輩にお会いしました。名古屋大学創立時の思い出で記憶に残ることをお伺いしたところ、間髪入れず、恩師小林先生の「愚直たれ」という言葉を頂きました。繰り返し「愚直たれ」と。ものづくり名古屋、「誠実、実直、堅実な名大生」の源流にたどりつく思いがいたしました。



ここで触れた基金のエピソードはごく一部であります。ご理解いただきたいことは、基金が沢山の方々的人生と大学への想いの結晶であるということです。企業から頂いた寄附金も、日々様々な現場で働く方々の汗と想いがまとまったものです。この場を借りて、深く御礼申し上げます。



私は、いま日本が、明治期、戦後の復興期に次ぐ転換点にあると思います。その理由は、2つ。膨大な財政赤字と、少子高齢化・人口減少時代の到来です。膨大な財政赤字は、昭和50年代より始まっており、戦後の団塊世代が曲がりなりにも繁栄と幸福を享受する中で生まれたものと言えます。換言すれば、若者の未来の犠牲の上に、我々老壮年の生活があり、次世代の若者に日本の未来を託すとすれば、我々は彼らに出来る限りの支援をする責任を負っているといえます。しかし残念なことに、今の日本は若者に十分な支援を行っているとは言えない。その象徴が、高等教育予算です。OECD諸国でGDP比最下位の予算である上に、唯一予算を削減するという嘆かわしい政策を続けています。同様の状態は、年金、医療保障の未来にもあり、それ故にこそ、若い諸君が閉塞感を持ち、結婚し家族を持つことに幸福を見いだせない人生観を持っているとは言えないでしょうか。いま我々は、若者が未来に希望を持てる高等教育を実践する責任を負っているのです。

さて、創立70周年記念式典を振り返り、改めて青春が如何にかけがえないものかを実感いたしました。式典の際、紹介しましたサミュエル・ウルマン(Samuel Ullmann)の『青春(Youth)』原文の一部を引用し、新年のご挨拶といたします。

本年が、皆様にとって多くの出会いと深い想いに満ちた一年となりますように祈念いたします。



YOUTH

Youth is not a time of life-it is a state of mind;
it is a temper of the will, a quality of the imagination, a vigor of the emotions, a predominance of courage over timidity, of the appetite for adventure over love of ease.

Nobody grows old by merely living a number of years;
people grow old only by deserting their ideals.
Years wrinkle the skin, but to give up enthusiasm wrinkles the soul.

Worry, doubt ,self-distrust, fear and despair-these are the long ,long years that bow the head and turn the growing spirit back to dust.

(中略)

You are as young as your faith, as old as your doubt;
as young as your self-confidence, as old as your fear;
as young as your hope, as old as your despair.

So long as your heart receives messages of beauty, cheer,
courage, grandeur and power from the earth, from man and
from the Infinite so long you are young.

(後略)

